

二、三十人の集団を組んで南を指して逃げていた人達の死体が転々と転がっていました。本当に死に物狂いの逃避行だったと思います。

駅に空の有蓋貨物列車が着き、自分達は糧抹の積み込みをさせられ、その上に、自分で作った大きな袋に衣料をいっぱい詰めて乗り込みました。その後は「私のシベリア抑留記」となります。

【編 注】

河村廣康氏の手記(一)は、第XIII巻に掲載されています。

私の終戦前後

神奈川県 牛窪 剛

私は大正十四(一九二五)年八月二日、神奈川県、当時高座郡渋谷村下福田にあります真言宗の末寺蓮慶寺にて、父弘善、母ハツの三男として生

まれました。大きな寺に、小学校卒業と同時に修業に出され、夜間中学に通うこととなりました。

中学五年を卒業する時、戦時下の折、即日産自動車に就職が決定されました。当時、室町二番地が日産の本社でした。連日のように職場から応募者を送り出し、現場も事務所も、女性の職場進出が目立って参りました。他に、地方からの女子挺身隊や、東京の大学やら、女学生が動員されました。

朝の工場の入門の際には、憲兵の姿が目立ち社員バッチは必ず着けていました。

輸送課では二十人位がグループを編成し、リュックサックを背負い、神戸や武庫川の東洋ベアリング、富山の不二越鋼材へベアリングを引き取りに何回も通ったものです。一般人は汽車の切符も手にすることは困難な時代ですが、我々には優先的に配慮されておりました。昭和十九(一九四四)年十月頃の車の生産量は一日で一〇台が最高の生産ラインでした。全車が貨物で、軍用車

でした。

私は青木小学校で兵隊検査は終わっており、次は栗田谷小学校にて、横浜連隊区司令官より「甲種合格」を申し渡され、いつ入隊通知が来てもと心の準備はできておりました。昭和十九年十二月の初め、葉書にて「一月十日、新潟県新発田連隊に入隊」の通知を受けました。

新発田には、私の次兄が入隊し、当時は千葉葉園台の予備士官学校に行っており、私も同じ第三機関銃中隊に入りました。間もなく「トラ」部隊要員として営庭を後にしました。

昭和二十年は大雪の年でした。四、五尺積もった雪の道を隊伍を組んで駅まで進む。市道の両側には、老若男女、町の方々がずらりと提灯を掲げ見送って下さいました。

部隊は、一隊は日本海に沿って下関で乗船。私達は盤越西線を会津、郡山、上野、品川と東海道を下り博多にて下車、博多では千代田館に一泊、

布団での就寝もこれが最後で、三年後の帰還までの温かいぬくもりであった訳です。

未だ暗い早朝、カレライスの朝食を取り、博多港で乗船ですが、従軍看護婦も二個小隊位、先に乗船、冬の玄界灘の荒波の中を、ジグザグ航行し釜山に着いて、漸く自分を取り戻す程でした。

汽車にて会寧駅に到着すると、迎えの曹長等が、次々に「足踏みを続行せよ」と叫んでおり、凍傷予防のためであった訳です。やはり、真夜中のためマイナス二〇度位と思います。

隊伍を組んで羅南師団、会寧朝鮮第三部隊に勇躍入り、歩兵砲中隊に配属されました。

当時、朝鮮軍司令官に板垣征四郎閣下、朝鮮総督は小磯国昭閣下、羅南師団長太田貞昌閣下、連隊長今堀元貞大佐、歩兵砲中隊長安富茂中尉でした。

○ 我が歩兵第七十五連隊歌の一節は次です。

満蒙の野に 幾度ぞ

雄々しく散りし 桜花

鬼将軍の あと忍び (加藤清正のこと)

熱血ここに 鍛えんや

○ 隊歌の一節には

遅るな 正直勇猛と

互いに交わす 合言葉

生死もとより 何かせん

只皇軍の名にかけて

この国境を守るのみ

我が連隊は、勇猛連隊で、昭和十三年の夏の張鼓峰事件に多くの犠牲者を出し、合言葉も「正直」「勇猛」と伝えられておりました。我々が入隊した時には、軍旗と共に南方戦線に出動しておりました。

私たちは新編成となり、第七十九師団、歩兵第二十九連隊となりました。今堀連隊長は帝都に赴き、聖上より新しい軍旗を拝受され、奏第二一五三部隊となりました。

会寧は、鮮満の国境にあり、軍都であり、各兵種の屯営が有り、工・騎・砲・輜・憲・病院等、ほとんどの兵科が揃っておりました。

そこへ、新品の軍旗祭が行われ、真更な軍旗のもと、多くの来賓者の見守る中、我々も、馬上で抜刀の中隊長指揮のもと歩武堂々の分列行進を行いました。

連日の砲作業、演習の合間に公用下士官のお供で、汽車にて南陽(豆満江沿いで、対岸は凶門)水口浦や潼関鐘城、上三峰等を何回か行って来ました。

私には何の用事か判らず、ただついて行くのみでした。この頃、中隊には軍馬が一二〇頭もいて、厩番に、これでもかと言うほど勤務しました。一日中、寝藁の出し入れで、身体中、あの臭いが浸み付き、帰隊すると「くさい」とよく言われました。

鮮満ソ国境に布陣中、山中にて終戦を聞き、第

三大隊に砲を向けて懸命に移動中、第三大隊より伝令が走り寄り、元の連隊本部に引き返すように言われ、急いだ訳ですが、帰着すると、既に連隊旗は、連隊長、中隊長等の立会いにて焼却し、菊冠は土中深く埋めた由、聞きました。

ソ連側に兵器引き渡しのため、連隊砲を乗馬に曳かせ参りましたが、我々は山で「停戦協定が成立した故、山を下りるよう」に上官、参謀等から言われていたのに、山を下りれば全くの負け戦で降伏していたとは、本当に情けない思いでありました。

部隊の将校と供に、私は汽車にて函門駅より延吉に向かいました。延吉（間島）では赤煉瓦の建物に入り、兵は小さくなつて隅の方に固まつておりました。そのうち、中佐参謀が壇上にも上がり、落涙の中で「作戦指導の誤りで、君らに……」と詫びる言葉が続いていました。兵はここで将校と別れ、半地下風の兵舎に入り、新潟北蒲原出身の阿部昭二君と二人で適当な場所を決め、食料確保

のためソ連兵と腕時計と食料と交換し、餅粟一叭と乾パン一箱等を手にして一安心、広い兵舎のあちこちに勝手に陣取りました。

二、三日すると、徒歩の部隊が次々と到着し、さすがの広い兵舎も人と軍馬でいっぱいとなりました。困ったことは井戸が少なく飲料水の不足で、軍馬が弱りました。

やがて、千人単位の部隊編成がなされ、私達は原隊と異なる関東軍の下士官集団に入りました。軍楽隊の一団も含まれていました。特に下士官の多くは富山県出身者が多く、また、ほとんどが曹長の階級でした。その中で山本曹長が一番の先任で、他から敬意されておりました。

いよいよ、ソ連行きの日が来て、我々の千人の隊も出発途中、排便、排尿の折はソ連兵の銃口が向けられて隊伍を離れる事を特に嫌っていました。出発順位が比較的早い方でしたため、道の両側の馬鈴薯^{ジャガイモ}や、トウモロコシ、大豆など、手あたり次第に取るのでお腹を満たすことができました

た。進むうち、左側が極端に落ちこみ深い谷が続
き、そこには日産の八〇型や一八〇型の新車が何
台も落下、腹を上に向けていて、何と情けなや、

山行きが、草むす屍、つは者が

大陸を行く 聖戦の

資材確保の任重く

誇れ国産 おお我等の ニッサン

と歌われた、あの日産の車が、こんな所で無残な
姿をさらしている。日産の社歌の二番を、こんな
辺地で想い出すとは。

ソ満国境の琿春に近づくに従い、土饅頭から、
あたり一帯にこもる死臭の中を半日も黙々進む。
道路のあちこちにソ連戦車の残骸が多く、キャタ
ピラが延び、あるいは爆破されていて、両軍の激
戦の様子がうかがえるのでした。

国境には、日本軍の鉄帽や、被甲（ガスマス
ク）、銃・剣・雑のう等が一带に散乱している。
それはソ連軍の急襲に対応し切れぬ様子でした。
また、国境の雑木林のほが、戦車、軍用車の激

しい往復で、更地状になり、立ち木一本も無い有
様でした。

ソ連領ポシエットの丘に、次々と国境を越えた
丸腰の日本兵が次々と到着し、丘は溢れる程にな
りました。我々は早目に到着したため塹壕状の場
所に、下に草を積み上げて、各自の天幕を張り寝
床としました。しかしながら獣医の下士官が、自
分の体と前途を悲しみ服毒自殺を遂げました。僧
籍の私は屍衛兵を勤め、翌日、頭部を東京方面に
向け、ねんごろに埋葬をしました。

また、この丘には低木のつつじ属の樹木が多
く、器用な兵士は根を掘り起し、煙草のパイプ作
りに専念する等で何日か過ごしました。

有蓋貨車の中は満席で、途中停車する事もなく
走りに走りましたが、車内では「浦塩はどうに過
ぎたはずだ」「方向が違う。北へ向いている」「こ
んな会話が、あちこちで交わされます。とにかく
く、曹長殿が多く「山本」「加藤」「本田」「加藤

木」等、互いに声を掛け合い、皆で元気づけておりました。

貨車はコンソモリスクで停り、後は徒歩で電台を通り、コンソモリスクに着きました。独軍に捕らえられたと言う赤軍の中尉が通訳に鞭で指して「丘の向こうの建物が、君達が暖かく冬を向かえる所だよ」と伝えました。

そこに入り、次の朝礼時、今の温度がマイナス一五度と知らされましたが、各人は皆夏衣袴のままでした。そこは二〇一収容所と言いました。

昭和二十年の暮から二十一年の夏頃までが食料は乏しく、人心は荒れ放題、困難の上なく、伐採のノルマも厳しく、最悪の生き地獄の期間でした。次々に逃亡者も出て参りました。

ある日私は、下痢が激しく菊池軍医に申告したところ、珍しく十日間程の軽作業に廻してくれました。私が依頼された作業は所内の鍛冶屋の天井の壁塗りで、相棒は隣に寝ていた、元日活の俳優でやさ男の滝口新太郎氏でした。彼は力無く、壁

土を大きなヘラで、上にいる私達に差し上げる事ができず、何とか、私の頑張りで仕上げることができました。彼は兵長で大変温和、スマートですがも芝居は本職ですから誠に上手で、いつも、芝居の時は拍手喝采でした。

その後、氏はハバロスクの放送局で日本向け放送をし、後に、モスクワで岡田嘉子氏と結婚、数年後病を得て亡くなられ、嘉子氏が遺骨を持って東京の墓地に埋葬されたと聞いております。

二〇一収容所の文化活動は盛んで、慰問団を編成し、他の収容所へ軍楽隊の演奏や滝口新太郎座長の芝居等で回っておりまして。

彼らの話から、先の収容所には巨人軍の水原監督や板垣軍司令官の息子（板垣正少尉Ⅱ後の参議院議員）の話が伝えられました。

奥の奥まで日本人が収容され、働かされていた訳です。雪が降れば、この一本道のトラックのタイヤの跡が残り、それには横浜ゴムのタイヤのY字の刻みがいつまでも続き、万感胸に迫るものが

ありました。

なお、作者不明、皆で歌った詩文「シベリア音頭」を次に記します。

◎ シベリア音頭

- 一 朝だ夜明けだ黎明だ 軍国廃塵のその上に
民主日本は高らかに 見ろよ大空雲一つ
- 二 寒い時と言うな友 吹雪鞭打つ密林で
試す俺等の身と心 故郷を忍んで月を見る
- 三 芽吹く木の香にや 風香る
起す土さえ喜びに 溢れ歓喜のタポールを
行くぞ荒波乗り越えて シベリア鍛えの
この腕で 明日の前途の戦いに
民主日本の建設だ

◎ ドーク小曲

- 一 流れ遙かな アムールの
河波越えて 来たものを
鳴いてくれるな 閑古鳥

鳴けば夕陽が 淋しかろ

シベリア嵐 すさぶる夜は
明けりゃ花咲く 銀世界
歌う声さえ カチュウシヤの
ロシア娘は 櫓で来る

茨の道を 乗り越えて
明日は 故郷の山川が
明るい朝が 待っている

◎ 冬は凍るよ

- 一 冬は凍るよ 山も川も
吹雪のあとは 銀の世界
オーロラオーロラ 天に輝く
- 二 冬は凍るよ 星も大地も
吹雪の後は 子供の世界
ハラショー ハラショー
スキーで走るよ

(瀬島龍三「回想録」より)

【解 説】

ソ連軍の満州侵攻

当時、関東軍司令部の参謀であつた、瀬島龍三氏の回顧録を読んで、シベリア抑留に関し、当時、一兵士としての体験について感じたことがあり、解説の参考にしたいと思う。

昭和十九年末頃のソ連極東兵力は「兵員約七十万(狙撃師団十九、狙撃旅団十五(二十)、飛行機約一千五百機、戦車は千両」と推定されていたが、その後の増強により、八月頃には「兵員総計約百三十万(狙撃師団約五十)、飛行機約五十二師団(五千機)、戦車約三十旅団(三千両)」に増えるだろう、との判断であつた。

満ソ国境地帯では、昭和二十年に入り、ソ連の国境侵犯が従来より頻発していた。

諸般の情勢から見て、政治的にも軍事的にも、この九月ごろソ連の対日参戦は必至と考えられ

た。

しかし、中央、現地とも、一部でなお、ソ連の対日参戦に対して懐疑的、希望的観測があつた。

これに対し関東軍の総戦力は次の如くであつた。

昭和十八年後半から、特に十九年以降、陸軍は主作戦正面の太平洋方面に在関東軍の精鋭兵団、航空機、作戦資材等を大量に抽出転用しなければならなかつた。

昭和十九年には十一個師団、一個旅団、一個戦車師団など関東軍の総戦力は実質的に半分以上が抽出転用された。

その後、対ソ防衛の重要性から、在支兵力の満州転用(二十年前半に約四個師団)、在満現地動員による兵団の新設措置が採られた。七月頃には一応、在満二十四個師団基幹、兵員約七十五万の態勢になつたが、二十四個師団の大部分は十九年後半以降新設された兵団であり、実戦力は極めて

低下していた。

そのような状況にかかわらず、関東軍総司令官以下、幕僚たちは一切弱音を吐かず、大命に基づき、肅然として最後の任務に臨もうとしていた。

関東軍の対ソ防衛作戦計画

昭和十六年十二月三日、関東軍総司令官に対し、新たに「大陸命」をもって任務を明示された。それは、南方（対米英戦）と北方（対ソ防衛）とは決して別のものではなく、戦争遂行の目的上、表裏一体、腹背一体であり、対北方の安全こそ極めて重要とする考えに基づくものだった。

この「大陸命」は、極力対ソ戦争の発生防止を主眼とし、関東軍総司令官本来の任務である満州国及び関東州の防衛、特に国境地帯での静謐を維持し、紛争を惹き起さないよう強く戒められていた。

また、対ソ有事の場合に処する作戦計画は政治

的には対ソ防衛だが、軍事戦略的には初期は国境方面で守勢をとり、次いで兵力の集中後、主として沿海州方面の敵航空根拠地覆滅の攻勢作戦を骨幹としていた。

国境地帯の戦備強化は対ソ戦防止と在満居留民保護を含む満州国防衛上、極めて重要だった。対ソ戦発生の場合。この劣勢戦力によって長期の持久守勢を図ることは戦略的に至難の業であった。

昭和二十年に入り、太平洋方面、欧州方面の戦局はますます我に利あらず、ソ連の対日参戦も予見されるに伴い、大本営陸軍部は大陸作戦全体の決断を迫られた。

八月十五日夜、関東軍命令発令

- 一、帝国は、米、英、ソ、支に対し、停戦す
- 二、関東軍は、万策を尽くして停戦目的の完遂を期す

- 三、各方面軍、軍、直轄部隊は、即時戦闘行動を中止すべし、ただし、停戦交渉成立に至

るまでの間、敵の来攻に当たりては自衛の
ための戦闘行動は妨げず

となったのである。

四、特に左記に留意すべし

- 各部隊は適宜の地域に集結し、爾後の行動を準備することを
- 放火、破壊を厳に戒めること
- 極力居留民保護に努むること
- 各兵団、部隊は、各々その当面のソ連軍と適宜停戦交渉並びに武器、築城等の引渡しを実施することを

この命令示達と同時に、各部隊は適宜兵員の召集解除を行える旨も示達された。

関東軍の停戦方針は決定したが、侵攻ソ連軍は十五日以降も進撃を継続し、各地で戦闘行動を続けた。我が軍の死傷者も生じた。

関東軍としては、何よりもまず彼我両軍の同時停戦を策することが緊要だった。大本営からは「関東軍は関東軍として直接、停戦交渉してよろしい」旨の連絡があり、八月十六日の関東軍命令